

【雨楽シリーズ 高岡のまちや】

かつての日本の家に確かにあったもの。本物の木と紙と土で造った家、時を経てなお趣を増す家、深い軒が陰影を描く家、応接の場になったり子供の遊び場になったりさまざまな機能を持った土間、家族の笑顔があふれる居間、開放したり仕切ったりしながら日々の暮らしに対応できる間取り、どこにいても家族の気配が感じられる空間。こうした家で子供たちは、家族の中での自分の位置や立場、思いやりや優しさ、絆や情緒を、五感で学びながら成長しました。

今一度とり戻したいと思います。日本の風土・文化・歴史に根ざした本当の意味での日本の住まいの原形。職人たちが精魂傾けた手仕事が光る家を造りたい。そんな思いを込めて完成させたのが「雨楽シリーズ 高岡のまちや」です。

# 今こそ見直したい。

●なぜ、深い軒を造るのですか？

「雨やどり」という情緒は、軒が深くなければ味わえませぬ。通り雨を避けて軒下を借りる2人のぎこちない会話…、映画のワンシーンのようです。

切り妻、寄せ棟など伝統的日本人家の屋根のフォルムを美しく構成するためにも、軒の長さは重要な要素でした。また、雨が多い日本の気象条件の中で、外壁の木部や壁面を守るのには深い軒でした。サッシなど外部建具や外壁材の

性能が良くなったために、軒は長くする必要はないという人もいます。しかし、日本古来の美意識が息づくまちやでは、軒が描き出す光と影のコントラストもまた、魅力なのです。

「雨楽シリーズ 高岡のまちや」では、深い軒が特徴のひとつです。軒の出が長いと、夏は暑い日差しを遮って涼しい風を取り込んでくれます。冬は、家の奥まで光が差し込み、もちろん雨の日でも雨滴が吹き込む心配がありません。軒下をちよつとした物置に利用することもできます。

【深い軒・土間】



がありました。屋外から内部への通路としてだけでなく、作業場であったり、台所だったり、多目的に使えるスペースでした。家の外と内との緩衝帯という見方もできますね。規格商品のような家が増え、効率的、無駄を省くという建て方が主流になって、土間のような用途を限定しないスペースが、いつのまにか無くなってしまいました。さらに、立派な玄関ドアが取り付けられ、外来者をシャットアウトし、インターホンを押さないと簡単に訪問できなくなつたのも、現代の住まいでしょう。

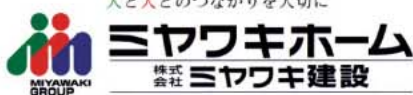
昔から「大工と雀は軒で鳴く」と言われるように、屋根の表情に合わせて軒の出を計算し、軒下の垂木を綿密に施工するのは、大工職人の腕の見せ所です。ここにも職人たちの美意識があります。工業製品ではない、本物の手仕事だからこそできる技のみごとなさを、ぜひ見ていただきたいのです。

●土間とはどんなものですか？

農家でもまちやでも、かつての日本の典型的な家屋には、必ず土間

「雨楽シリーズ 高岡のまちや」では、土間を見直したいと考えました。かしこまった「玄関」はあえて設けず、四畳半程度の土間を造りました。回覧板を届けてくれたご近所さんと土間での談話。あらためて靴を脱いでいただくまでもなく、気軽に応対できますよね。バイクや自転車を置くこともできますし、趣味の工房にもなります。雨降りの日には、子供たちの格好の遊び場に早変わり。とても多彩な機能を持たせることができます。

いつの間にか消えてしまった空間が、実は、暮らしをいきいきと楽しめる場だったというのが、「土間」でわかると思います。合理的な住まいを求めた結果として、大切なものを捨ててしまっていることに、今、気づいていただきたいのです。



人と人とのつながりを大切に  
〒933-0826 高岡市佐野1400番地の1  
TEL 0766-26-2581  
http://www.miyawakihome.com/

●常設展示場 会場インフォメーション  
**information**  
★日・祝日/10:00~17:00  
★平日/連絡いただければ開館致します  
☎0120-26-2582  
※HPでも内観を見ることが可能です

